



都市農業から生まれる国際交流

金丸弘美

食総合プロデューサー

東京都内で野菜作りを学び収穫し新鮮なものが食べられる。憩いと緑と地域に触れあいをもたらすと評判になっているのは練馬区の市民農園。

「練馬方式」と言われ、作付け計画表があり、毎週の講習で、季節の野菜作りを種まきから収穫まで指導してもらえる。誰でも上手に野菜づくりができる。園主のほうで、畑が用意してあつて、種、鉢、バケツを始め、野菜栽培に必要なものすべてが揃えてあり手ぶらで参加ができる。

主宰の農家は、野菜作りだけではなく、野菜の



市民農園参加者の野菜作り

講習で安定した収入がもたらされ、人々に喜びをもたらし、都市の農地が守られるという優れた取り組みだ。

プロの農家の講習付き体験農園という仕組みが始まったのは平成8年。最初に考案し取り組みとして始めたのが加藤義松さん「緑の農の体験塾」と白石好孝さん「大泉風のがっこう」。お二人とも江戸時代から続く農家。かつては農作物を栽培し出荷するという従来の農業の形だった。大きな転機を迎えたのは、都市ならではの農業事情がある。後継者のいない農家の農地は、区が借りて、区民農園として貸し出している。ところが期間が1年11か月と短い。教える人がいないと区画によって個人差があり出来不出来がある。新たに貸し出すとなると畑の整備が必要で人手も予算もかかる。野菜を栽培してみたいという人は多くいるが、上手く継続的に作ることができない。

そんなことから、農家が畑を整え区画割りをして、**プロの農家が野菜作りを指導し**、一般の方に畑を開放し最長5年まで参加できる形が生まれた。希望があれば抽選で、さらに継続できる。練馬区**ならではの**まったく新たな市民農園が誕生した。18農園があり区も支援している。

加藤さん、白石さんとは、開始当時から存じあげていた。「味の味」で野菜作りを連載していたら

つしやる檀太郎さんは、福岡に移住する前に、加藤義松さんの農園に通っていらした。

練馬方式がモデルになり、種や道具を揃え、指導員がいるというスタイルは、今では、都内と近郊の農家は100軒以上、企業が運営するものが100か所以上にもなり、全国にもノウハウが広がっている。

(これらの農園を運営する園主たちの組織)練馬区農業体験農園園主会の初代会長は加藤さん、2代目が白石さん、そして現在は3代目の五十嵐透さん。五十嵐さんが市民農園を始めたの平成11年。大学を出て3年会社勤めのもと、父親が亡くなり、江戸時代からの農業を継ぐことになった。最初はキャベツ栽培だったが、加藤さんと白石さんに教えを請い市民農園に転換し、地域の人の集いと収穫の喜びの場となった。現在、3m×10mの体験農園が117画ある。3月から始まり11月まで。参加者は、女性ひとりから、家族連れ、友達同士など多彩。参加費は年間5万円。ただし区民は区の支援があり3万8000円。

金曜、日曜は午前、土曜日は午前・午後の講習があり、作付け表に従って種や苗を植える。キャベツ、ブロッコリー、ニンジン、白菜、カブ、春菊、小松菜、ほうれん草など年間で25種類の野菜を栽培する。五十嵐さんの30分ほどの講習のあと、それぞれの畑で作業となる。畑では初めてという人を中心に指導となるが、すでにベテランの人がいて、新人の人をフォローもしてくれる。

「新規の人を中心に、区画をぐるぐる回って、アドバイスします。何年かやっている人は、だいたいわかっているから大丈夫。この市民農園がいいところは、みなさんが収穫を楽しんでいると言ってくれることなんです。近くの人を利用して、自分の庭感覚で、朝に収穫して朝ご飯に、夕方に採



園主会会長の五十嵐透さん

りに来て夕食に使う人もいます。この畑で知り合っただけで友達になって蕎麦打ちやってるなんて人もいます」と五十嵐さん。

市民農園は、これまでになかった広がり発展している。農園での持ち寄り料理の交流会、収穫祭、福祉施設と連携しての野菜作り、子供食堂への野菜提供、練馬区の区民農園が連携しキッチンカーも登場し、新鮮野菜の料理やもぎ取り体験風景までを楽しむ集いも行われている。

「農業体験の価値は、自分の生活の一部として楽しんでもらえているのではないかなと思っっています」と、満面の笑顔をたたえる五十嵐さん。

加藤義松さんの農園からは海外ツアーも生まれました。参加していた人で海外の会社にいた方の伝手から、ハワイの市民農園の視察旅行に繋がりが、それがきっかけで、希望者を募り、これまで中国タイ、ベトナムなど、世界17か国の農村の旅も行われている。

2019年、ニューヨーク、ロンドン、ジャカルタ、ソウル、トロントから人が参加しての「都市農業サミット」も開かれ、ロンドンやニューヨークでも、市民農園が広がっていて、国際交流も今では生まれている。